

— 資 料 —

小豆島らしい子育て環境についての調査報告
—「島出身の母親」と「嫁いできた母親」の語りの比較から—

塚 田 みちる

Survey report on Shodoshima unique child-rearing environment
— Comparison of the narrative of Born and raised mothers in Shodoshima and
mothers who emigrated by marriage to Shodoshima

Michiru TSUKADA

要 旨

本調査は「小豆島らしい子育て」の環境を捉えるべく、現在小豆島で子育て中の母親を対象に子育てのメリット・デメリット、それへの解決策の観点から調査した。「小豆島出身の母親」と「島外出身の母親」との比較という観点を盛り込み、子育て環境について質問紙調査および聞き取り調査を行った。その結果、小豆島での子育てのメリットとして、地域に古くから繋がっている社会的ネットワークによって作り出される「子どもを守ろうとする風土」があると認識されていると分かった。その一方で、島外から嫁いできた母親はそうした地域社会に溶け込むことの難しさを感じており、それがデメリットになりうることも分かった。そここのところを解決するために若い世代同士での新たな人間関係を構築するパターンと、祖父母世代を介して地域社会に溶け込もうとするパターンが明らかになった。しかし、その関係の持ちようは居住している地域によって異なることもうかがえた。子育て環境における「共同体としての地域性」に着目することの重要性が示唆された。

はじめに

本資料は平成25年度～28年度まで行吉学園教育・研究助成費を受けて実施した「小豆島らしい食育活動と幼児のその子らしさの育ち」のうち、小豆島で子育てをしている母親への調査内容をまとめた報告書である。母親の語りを中心にまとめたのは、「小豆島での子育て」の実体を捉える試みが発達心理学の領域でこれまでほぼ未着手であったと思われるため、島での子育ての実態を探るには母親たちの素朴な語りを手掛かりにすることが有効と考えたためである。そのためフィールドワークによる記録という意味合いが強いと判断し研究資料とした。有人離島での子育てのありようを捉えるために様々な試みがなされているが、その一つに発達心理学のアプローチがある。たとえば宮内ら¹⁾は、いくつかの離島部間で子育ての共通点や差異があるのかを、さらには都市部の子育てとの共通点があるのか否かという視点から研究を積み重ねている。こうした積み重ねの先に既存の「日本の子育て」とされる行為の相対化に辿り着くだろうところに、その意義を主張している。本研究もその枠組みに賛同しているが、ここでは

「島出身」と「島への移住者」との違いによって子育て観に違いがあるのかという視点を盛り込んだところに独自性があると考えている。

本資料の構成は、まず、問題意識の所在として本調査を始めるきっかけが、ここ最近の若い世代に自己肯定感・自尊感情が低い傾向にあるのではないかという筆者の懸念に端を発していること、またなぜ小豆島というフィールドなのかについて述べる。続いて資料収集の方法を述べ、母親の子育て環境への意識という観点から「小豆島らしい子育て」の結果を紹介する。先んじて結論を述べると、小豆島で子育てをする最も顕著な特徴は、子育て環境の対人関係、すなわち、その地域に古くから繋がっている社会的ネットワークによって作りだされる「子どもを守ろうとする風土」があると捉えられている点であった。

問題意識の所在

1. 小豆島出身のある学生との出会い

本調査を始めるきっかけになったのは、筆者が所属する本学幼児教育学科のある学生との出会いであった。その学生は入学後2ヶ月くらいすると休みがちになった。それ自体はよくある5月病として取り立てて話題になるようなことではないであろうが、その後細々と登学した折に話を聞く機会があり、大学を休んでいる時は小豆島の実家に帰っているという話になった。大学を辞めたいと話すときは涙ながらの様子であったが、小豆島の話になると少しほっとしたような表情になった。そこに立ち直れるきっかけがあるように直感的に感じられて、小豆島での暮らしぶりを語ってもらうことにした。本学生は自分が「島育ち」であることをつくづく感じるという内容をしばしば語っており、彼女の心に小豆島での暮らしがしっかり根付いているように思われることがあった。彼女が語る「島育ち」の特徴は一言で述べると「人との繋がり」であった。それは家族との繋がりのみならず、隣近所との繋がり（必ずしも血縁関係にない）、同級生の友達との繋がりなど多岐に及んでいた。自分が暮らしている地域に見知らぬ人はいないというほど、網の目のように張り巡らされた地域社会に根付く存在として自分自身を捉えているようであった。こうした話題を何度か繰り返し語ることで、徐々に元気を取り戻して夏休み明けにはすっかり元気になった。立ち直るきっかけが、語ることにあったのか、小豆島での生い立ちにあったのかが不明であったため、小豆島出身の別の学生にも同様の聞き取りを行った。彼女も島での人間関係を「すごい絆」と表現し、小豆島を出て関西で暮らすようになった今でも島出身者の集いである「島っこ組」「島っこ会」が心の支えであることを語った。生活地域の人々の間に根付いて暮らしてきたという歴史が、心理的に危機的状況に陥った時などいざというときに頼りになる拠り所として彼女たちの心の支えになっていることの確からしさが推測された。こうした環境は都心部で生まれ育った筆者とは、かなり異なる環境である。それがますます彼女たちの生い立ちに興味を抱くことになった。このとき興味を抱いたことが後に、筆者のこれまでの研究の視点を大きく転換させることになった。すなわち、これまででは子どもの心の育ちや親の子育てを母子関係という観点から捉えることに留まっていたところから、親子を取り巻く地域社会の繋がりへという広い視野で捉える機会になったのである。

ところで先の事例は大学に入学するというライフイベントに伴う一時的な自信喪失と考えら

れるが、このように環境が変化することに伴う適応過程を心理学では「環境移行」という²⁾。とりわけ発達心理学の領域では人生移行という観点から、新しい環境への移行は、うまく適応できるか、あるいは適応が失敗して何らかの不都合な事態を引き起こしてしまうかの分岐点になるという意味で危機的場面となることが指摘されている^{2),3)}。すなわち、引っ越しなどによって新しい環境での生活が始まったり入学や進学によって所属先の学校が変わったりといった人生における大きな変化に直面したとき、そこをうまく潜り抜けられるかどうかは本人の頑張りなど個人の資質の問題だけではなく、本人を取り巻く物理的・対人的環境にも目を向ける必要があると言える。この点は後述する「子育て世代による小豆島への移住」という最近の動向に目を向かわせることになった。

さらに興味深いことに、今を生きる若者の「自己意識」について国際比較調査を実施した内閣府の資料『平成26年度版 子ども・若者白書』によれば、諸外国（韓国、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデン）と比べて日本の若者（満13～29歳）は自己を肯定的に捉えている者の割合が低く、うまくいくか分からないことに対し意欲的に取り組むという意識が低いという。このことは、ライフイベントに伴う一時的な自信喪失にかかわらず自己肯定感が低いことが常態化していると思われる。ただし自己肯定感が高い者の特徴を見ると、家族関係、学校生活、職場生活が充実し満足している若者ほど自己肯定感が高いという傾向も示されている。これらのことから、子育て支援や家庭教育支援、きめ細やかで質の高い教育の実現に向けた環境づくりや地域ぐるみでの学校支援などが重要であり、家庭、学校、地域が一丸となって子どもや若者の成長を温かく、時には厳しく見守り支える環境づくりをすることがより一層必要となる。そのことによって社会との関わりが自覚され、また自己肯定感が生まれ、ひいては子どもや若者が将来に明るい希望を持つことに寄与するのだと指摘されている。我々大学教員に引き寄せて言えば、どのような大学生生活の環境を整えば、学生が安心感を抱いて素の自分をさらけ出し、他者との交流を通して自己肯定感を育むことができるのか。先に述べた小豆島の学生との出会いは、我々の提供する教育現場で学生の心の育ちをいかに支援するかという大きなテーマをも内包していると考えられる。

2. 離島の子育て～発達心理学的アプローチ

香川県小豆郡に属する小豆島は瀬戸内海では淡路島に次いで2番目の面積（153.30 km²）にあるが、本州・四国から橋やトンネルなどでつながっていない非架橋有人島としては瀬戸内海で最大の島である。人口は約三万人（2010年推計）。小豆郡には小豆島のほかに豊島、小豊島、沖ノ島、余島などが含まれる。小豆島は二町体制である（小豆島町と土庄町）。今回の調査は土庄町の一部の地域の保育園と幼稚園に協力を得た。土庄町へのアクセスは高松港をはじめいくつかの港からフェリーや高速艇を利用できる。かなり多くの便数があり、海に隔てられているとはいえ足の便は良い。このように四方を海に囲まれている小豆島には「昔から島の中だけで賄っていく自給自足力と外界へのあくなき憧れと冒険心を併せ持つ気風が育まれてきた」のだという（平野公子と島民のみなさん p.11）。

ここ10年ほどの間に、日本の離島と呼ばれる地域の子育ての実態を探るために、発達心理学

の領域においてさまざまな地域の離島研究がおこなわれている⁴⁾。宮内ら¹⁾によれば、こうした知見を積み重ねた先に、これまでの「日本の子育て」とされる行為の相対化、そして「日本の子育て」再考の端緒が見えるのだと言う。たとえば北海道の利尻島、東京都の小笠原諸島、沖縄県の西表島等での聞き取り調査によれば¹⁾、①当該島における子育て上の利点、②当該島における子育て上の問題点、③親による②の問題点に対する解決の方略を調査した結果から、これらの地域での子育てにおける共通点を次のように指摘する。すなわち、利点における共通点は、自然の豊かさ、地域の中の緊密な人間関係に包まれた子育てや、その反映としての安全性である。その一方の問題点として、医療体制の乏しさ、物資の入手のしにくさ、子育てサポートや教育機会の不足、子どもの数が少ないことによる子ども同士のネットワークの乏しさがあるという。これらの結果から、離島の保育は、こうした困難に積極的に対処し、たくましく子育てをやりくりし、自らの判断や経験に基づいて行わざるを得ない子育てのスタイルというものがもたらされたのだらうと指摘する。すなわち子どもの存在がもつ要求性は、家族と地域のネットワーク構築への推進力をもっているのだということである。これと対比的に都会的な状況では、子育てのニーズに対して第三者が営利的、行政サービスの的に応える保育環境が提供されている。手軽に利便性を享受するという親の姿勢のため、要求的な子どもの姿が相対的に影を潜め、かつ育児における親の主体性が弱まるという事態を生んだと考察されている。つまり、子どもが発信する親への要求は、時に執拗に繰り返され、時に待たなしの対応を迫り、親の方の対応がままならないことさえある。しかし、そうした親（や家族）だけではまかないきれないときに、物理的環境を利用することを思いついたり、地域に共に暮らす人々に助けを求めたりといった解決策を自ら作り上げているところに離島の子育てや保育の特徴があると言えるのだらう。

本稿で取り上げる母親への聞き取り調査は、宮内ら¹⁾の質問項目を参考に行った。結論を先んじて述べると、小豆島の母親らの語る「小豆島らしい子育て」の利点は「子どもにとっての暮らしやすさ」である。そうした環境を作るため、子どもを取り巻く周囲の大人たちが世代を超えて繋がり合おうとする姿を見ることができた。また、後に詳述するように、子どもの親世代を支える祖父母世代の活躍が多く語られるところであった。

3. 子育て世代による小豆島への移住

移住というとは、かつては国外へ生活の拠点を移すことに使われる表現であることが多かったが、近年は地方へ拠点を移すことにも使われている。2015年度版の国土交通白書によれば、都市部から地方へ移住を希望する傾向が全国的にあるようで、小豆島もその対象地域の一つといえることができるだろう。というのは、四国新聞社の記事（2013/4/15）によれば、「小豆島への移住増 町が初調査/子育て世代多く」みられることが取り上げられている。小豆島町では平成24年度に移住者が120人に達し、特に「子育て世代」が増えているのが特徴だという。その理由の一つに「子育て支援の充実」がある。また、平成26年度のIターン（移住者）は、131人になったことが紹介されている⁵⁾。前掲⁵⁾によれば、出身地とは別の地方から移り住む、特に都市部から田舎に移り住むIターン131人のうち、20～29歳までが53人、30～39歳までが29

人にのぼり、二つの世代を合わせると全体の62.6%、全体の半数を若手層が占めていた。これらの傾向を見ると、若手層の移住者を引き付ける魅力が小豆島の暮らしにあることは間違いなさそうである。

そこで今回の調査では、小豆島で子育て中の母親に子育て環境への意識調査を実施した。一部の母親（小豆島出身の母親と結婚によって他の地域から小豆島に移住して子育てをしている母親）に聞き取り調査を実施した。両者を比較することで、「小豆島らしい子育て」のありようがより浮き彫りになるものと考ええる。

方法

1. 協力者

小豆郡土庄町の保育園・幼稚園を通じて、質問紙調査と母親への個別聞き取り調査を実施した。質問紙調査は6園に依頼し計257名に配布した。配布期間は2015年7月から10月であった。2016年3月までに109部が回収された（回収率42%）。質問紙はすべて無記名で行った。個別聞き取り調査は、質問紙に依頼文を添付し（保育園児の母親197名対象）、それに応じた8名の母親に実施した。実施期間は2016年2月～3月であった。聞き取り調査に先立ち、調査の主旨が「小豆島らしい子育ての実際を知る」ことであると説明し、協力の意思を確認し同意書の提出を依頼した。母親はすべて有職者で、年齢は30～41歳。小豆島出身者4名、島外から結婚もしくは出産によって移住した者4名であった。居住地区は、土庄町の中でも比較的人口の密集している地区と、そこから車で20分程度離れた比較的人口の少ない地区である。

2. 手続き

母親の個別聞き取り調査は土庄町内の保育園内の一室で行った。所要時間は一人約1時間であった。調査項目は、①小豆島での子育てにおけるメリット・デメリット・解決策、②「我が家の食自慢」として食の環境について、③子どもの育ちについて思うことの3点をもとに、母親と筆者で気軽におしゃべりするような感覚で母親には自由に思いつく順に話をしてもらうことにした。記録は母親の了解をとり、ICレコーダーに記録した。

3. 質問紙調査

質問紙は子どもの年齢などのフェイスシートのほかに、現在の子育て支援の環境、食育環境への意識などに関する項目を、全国の地方自治体で実施している子育て支援に関する調査項目を参考に作成した。子育て支援の環境については、現在の子育て支援サービスの利用状況（2項目）、子どもの預け先（1項目）、子どもを預けた時の心境（2項目）、子育てに関する相談相手（1項目）の計6項目を尋ねた。各項目は複数回答である。また小豆島での子育ての利点と不便な点、解決策については自由記述欄を設けた。食育環境への意識に関する項目も用意したが結果は本報告に含めていない。質問紙の最後に小豆島出身か否かの回答を求めた。

4. 分析

質問紙は回収された109名を分析対象とした。子育て支援の環境に関する6項目におけるそれぞれの選択肢を選んだ人数をカウントして、度数分布表を作成した。個別聞き取り調査に応じた8名の語り（ICレコーダーの記録）を書き起こしボトムアップ的にカテゴリーに分類して整理した。

5. 調査地の概要

小豆島は小豆島町、土庄町の2町からなる。人口・面積とも最大は小豆島町であるが、島の玄関口であり多くの商業施設や県出先機関が所在するのは土庄町である。土庄町は山地が多く、高い山が海岸にまでせまっているため平地は少なく、民家はそこに集中している。そのため小豆島には、寒霞渓や銚子溪など、人々を魅了する美しい自然がある。伝統的な産業として醤油製造をはじめ、特産の醤油を生かし戦後始まった佃煮製造、醤油とおなじく400年の伝統をもつ手延べ素麺などの食品工業が中心である。別名「オリーブ・アイランド」とも呼ばれる小豆島は、数多くの観光スポットを有し、観光産業やオリーブオイルをはじめとしたオリーブ製品の製造も盛んである（小豆島町 HP、土庄町 HP より）。

土庄町の人口は15,123人（2010年、総務省統計局国勢調査より）。年少人口（0～14歳）、生産年齢人口（15～64歳）は減少傾向にあり、一方で高齢人口（65歳以上）は増加傾向にある（2015年10月土庄町創生総合戦略概要より）。土庄町の玄関口の一つである土庄港付近にはチェーン店やコンビニエンスストアがあり、2013年7月現在6店舗営業している。島内ではこのほか、ファミリーレストラン1軒が深夜営業（1時まで）を行なっている。交通アクセスには車両乗船可能なフェリー、高速艇が運航している。便数は四国側の高松港へ発着するものが最も多く利便性が高い。そのほか、本州側からは岡山港、日生港、宇野港、姫路港、神戸港からのフェリーも運航している。

近年の特徴として2010年から開催している瀬戸内国際芸術祭がある。これは瀬戸内海の島々を舞台に開催される現代美術の国際芸術祭である。この開催により、島の住人と世界中からの来訪者の交流により島々の活力を取り戻し、島の伝統文化や美しい自然を生かした現代美術を通して瀬戸内海の魅力を世界に向けて発信している。2016年3月の開催時の来場者数は、小豆島に9,225人、豊島に7,586人（瀬戸内国際芸術祭実行委員会事務局より）と報告されており、多くの観光客を引き付ける一因や移住のきっかけとなっているようである。

結果・考察

本研究では、小豆島らしい子育ての実際にできるだけ迫るために母親の素朴な語りを中心に結果をまとめた。そのため、母親らの語りの内容を確認する形で質問紙調査の結果を提示することにした。

1. 記述内容の分類

母親の語りの内容について分類を行った。はじめに子育てのメリット、デメリット、解決策

の観点から、その主だった話題を簡潔に表すラベルを話題のまとめりに付した。次に、これらのラベルを整理して、内容的に類似したものをまとめてカテゴリー化した。そして再度すべての語りに目を通し、カテゴリーを追加したり統合したりするなどしてカテゴリーの精緻化を図った。こうして生成された10のカテゴリーに基づいて改めてすべての語りを読み返し、すべてがこれらのカテゴリーのいずれかに分類できることを確認した。その結果を表1に示す。表中の○は該当の語りが生じたことを示している。

全体を概観すると、島内外出身者に区別なく全員に共通する傾向として、子育てのメリットに「近所付き合いの緊密さ」、子育てのデメリットに「近所付き合いの難しさ」が語られていた。この点については「2. 近所付き合いのメリット・デメリット」として後述するが、メリット・デメリット両面に周囲の人の関わりが取り上げられるほど、小豆島での子育て環境では対人関係に重きが置かれていることがうかがわれる。そうした対人関係のメリットは「子どもを守ろうとする風土」としても語られていた。

小豆島出身の母親に特徴的な見方として、豊かな自然の中で子どもがのびのびと過ごしてい

表1 語りの分類結果

カテゴリー名と語りの例		小豆島出身者				島外出身者			
1. 子育てのメリット		A	B	C	D	E	F	G	H
近所付き合いの緊密さ	(例) 世代を問わず昔から知っている人同士の繋がりがあ、地域行事、子どもの行事が多い、母親同士の助け合いがある	○	○	○	○	○	○	○	○
ゆったり・のんびり感	(例) ゆったりと時間が流れている、治安が良い、子どもがのびのびしている	○	○	○	○	○			
子どもを守ろうとする風土	(例) 近所の目が子どもに行き届いている、人助けをするという暗黙のルールがある		○	○	○		○	○	○
自然の豊かさ	(例) 自然が多くて外遊びのさまざまな経験ができる			○	○	○			○
2. 子育てのデメリット									
医療体制	(例) 近隣に小児科医のいる総合病院がない	○	○	○	○	○	○	○	
習い事などの教育面	(例) 習い事の種類の少ない				○	○	○		○
交通の不便さ	(例) 島外へは船のみ、島内は車を使わないと移動しにくい	○	○	○	○	○			○
子ども同士のネットワークの少なさ	(例) 地域の子ども数が減少して子どもの同級生が少ない		○	○	○				○
子育て支援サービスの少なさ	(例) 親がリフレッシュするための一時預かりサービスがあれば助かる					○		○	○
近所付き合いの難しさ	(例) 周りが高齢者ばかり、うわさが広がりやすい、昔からの繋がりでしがらみがある	○	○	○	○	○	○	○	○

るとみなすことが挙げられる。生まれ育った地域で、また、近所付き合いが緊密な中で子育てしていることは、精神的にもゆったりとした時間の流れを感じさせるゆとりを母親にもたらしめているのではないだろうか。

一方のデメリットを見ていると、小豆島出身者と島外出身者でいくらか異なる様相が見られた。島外出身者は、「習い事などの教育面」と行政が提供する「子育て支援サービスの少なさ」に関して語る母親が多く見られた。これは、島外から移住して子育てをしている母親は、里帰り出産などで実家のある地域に戻った時に、他の地域での教育や子育て支援サービスの情報に触れる機会があり小豆島での生活と比較するためである。たとえば、母親Eは「実家があるところではお母さんがリフレッシュできるサービスがあって利用していたけれど、こっちに來たらそういうサービスがなかった。うまく見つけられないのかもしれないけれど…。それから病児保育のサービスとか、子どもを少しの間預かってくれるところがない。旦那の親も働いているので頼みづらい。親が2人とも小豆島出身だと祖父母が預かってくれる環境が整っているみたいだけれど…」と語っていた。この母親は小豆島に移住して1年経ったところで、近所付き合いをしたいけれどもまだまだ「よその感」があって難しいと述べていた。こうした「よその感」について語った島外出身者は他にも2名おり、移住して9年目になっても「3代住んだら島の人。みんな何でも知っている関係で（自分は）今でもよそ者だと思う」（母親G）。

こうした「よその感」を抱く一方で、子育て支援サービスを通してママ友をつくるという解決策についての語りも聞かれた（母親F、H）。島外出身者にとって、地域社会での高齢者中心の繋がりとは別に、新たな繋がりへの仲介役として子育て支援サービスが機能していることがうかがえた。また、地元の行事に積極的に参加して地域の人の繋がりに溶け込もうとしたり、子どもが通園している園の先生を心頼みにしていたり、同世代の母親同士の集まりを企画したりすることが解決策として語られた（母親E）。古くから繋がっている地域社会のネットワークは、子どもにとっては近所の目が合って「守られている」という安心感がある一方で、県外から嫁いで来た若い母親には高齢者中心のそうしたネットワークにどのように溶け込むかに難しさを感じていることがうかがえた。

ここまでのところで明らかになった内容をなぞる形で、質問紙調査で得られた結果をみってみる。質問項目のうち「小豆島で子育てをすることの利点は、どのようなことでしょうか」に関する小豆島出身者と島外出身者の回答割合を求めた。なお、分析対象109名のうち、小豆島出身か島外出身かの回答がなかった9名は分析から除外した。さらに小豆島出身者78名のうち本項目に無回答だった6名、島外出身者22名のうち本項目に無回答だった1名も分析から除外した。その結果を図1に提示する。

数値の最も高い回答は「環境の良さ（自然の豊富さなど）」、次に多かったのは「近所付き合いや地域の交流のよさ」、そして「子育てにおける安心感」であった。先の表1で「子育てのメリット」の下位カテゴリー（近所付き合いの緊密さ、ゆったり・のんびり感、子どもを守ろうとする風土、自然の豊かさ）に合致する項目であった。この点が「小豆島らしい子育て」を支える利点であることが改めて確認された。

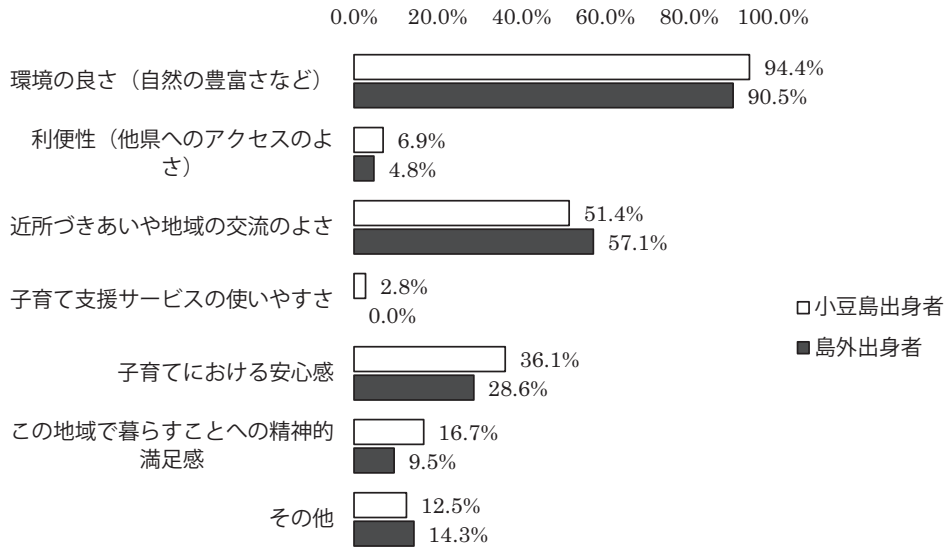


図1 小豆島で子育てをすることの利点

2. 近所付き合いのメリット・デメリット

前出した表1で見たように、近所付き合いには「緊密さ」というメリットと「難しさ」というデメリットとの両面的側面があることが示された。そこで、これらの語りの分析を進めたところ居住地区によって語りの内容に違いが見られたため、以下では居住地区の違いという観点も盛り込んで紹介する。

島出身者のうち比較的人口が密集している地区に暮らす母親によれば、この地区での近所付き合いはほとんどないのだという。母親Aは「近所付き合いがなくて楽だし、スーパーもコンビニもあって便利でいい」と語り、それは自分の出身地区に比べて近所付き合いがないということであった。出身地区は不明であるが、そこでは高齢者が多く「みんな親みたい」な関わりであり、それが「うとうとしい」のだという。はっきりと「干渉されたくない」と語っていた。島外から移住してきた母親Eは、「周りは高齢者ばかりで空き家が増えている。お付き合いしたくても世代が違うのでなかなか難しい」と語っていた。また、現在は島内の別の地区に嫁いだが、実家が人口密集地区にあるという母親Bも「今住んでいる地区に比べれば、(人口密集地区は) あっさりしていた方だと思う」と語った。人口密集地区は、先に述べたように、島への玄関口にあたる土庄港の周囲の地区である(たとえば土庄地区人口総数5,106人、世帯数2,188、洲崎地区人口総数2,833人、世帯数1,147、2010年国税調査より)。スーパーやコンビニもある。土庄港から高松港には1日約30便の船便が出ており島外とのアクセスが簡便である。島内外の人の往来が多いことも想像される。周囲の人との繋がりが以前より希薄になったとしても様々な生活上の便の良さに助けられており、地域社会の人の繋がりにそれほど頼らずとも暮らせるのであろう。しかし近所付き合いがなくて気楽な分、気軽に子どもの世話を頼んだりする繋がりは少ないということであった。その解決策として上述の母親Aは、子どもが通園

する園にたまたま元同級生で島出身の母親がいることが分かり、今ではそういう母親同士で互いの子育てを助け合うという繋がりを積極的に作っていた。島外出身者の母親Eは、子どもが通園する保育園の先生や子ども同士が仲の良い家庭との繋がりに助けられているという。これらの母親の語りから高齢者中心の社会的ネットワークに入り込むことに難しさを抱える一方で、自分の生活形態に合った若い世代の繋がりを選びながら（もしくは新たに作ろうと努力しながら）必ずしも既存のネットワークに溶け込まなくともうまくやっていく可能性を模索しているといえるだろう。

一方、土庄港から車で10分程度しか離れていないにもかかわらず、別の地域では近所付き合いの様相がずいぶん異なっていた。母親Bは「ご近所付き合いが密。（血縁関係にない近隣に住む）おじいちゃん、おばあちゃんの声かけがすごくある。子ども連れて歩いてると〇〇ちゃん、お米つくってみるかーとか。その分、子どもに警戒心がないけど。みんな昔の代からの長い付き合い。（これまで）何があったのか、よく知ってる。嫁に来たとき「来てくれてありがとう」って言われてびっくりした。（自分に）子どもが生まれた時、近所の人から「（生まれた子は）うちの四女」と家族みたいに言ってくれた。この地区で生まれ育った人は大人になっても仲が良い。たびたび集まっている。10月の秋祭りはすごい。一体感がある。（実家のある人口密集）地区とはちょっと違う」と語っていた。また、母親Cは「小さい地区でお年寄りが多い。人口が少なく近所付き合いが密。この地域で生まれ育って他に出たことがない。小さいころからみんな知り合い。島っこ同士（島出身のお母さん）と気が合う。波長が合う。学生の時から繋がりがあったし、言葉のトーン（なまり）に安心する」のだという。小豆島出身の母親Cも島っこ同士の親近感について「話が合う。何でも聞きやすいし教えてくれる。昔のこと、いいこと悪いことみんな知ってる。自分が生まれ育ったところの言葉のトーンに絶対的な安心感があって落ち着く」と語った。この点を島外出身者の母親Gは「みんな何でも知っている関係」と言い、この関係のありようを「点と点で繋がって線になる」と表現していた。つまり、血縁関係になくとも、これまで先祖代々暮らしてきた経緯をお互いに承知しており、どこかで誰かに繋がっているという目には見えない繋がりが網の目状に張り巡らされていて互いを支え合っているといったところであろうか。傍から見れば、この繋がりのありようが密接なほどネットワークに入ることに難しさを感じるであろうし、移住して何年経っても「よその感」を拭い切れないという感覚を抱かせると思われる。島外から嫁いで来た母親Fは、そのところを「おばあちゃん」が埋めてくれているという。「結婚当初から（配偶者の母である）おばあちゃんと同居で私は仕事をしてきた。子どもの面倒、ご近所のお付き合いはおばあちゃん頼み。おばあちゃんの世代の付き合いあつての今だと思う。おかげで日頃から気にかけて暮らしている。」

今回調査の対象となった8人の母親のうち、6人（小豆島出身B、C、Dと島外出身F、G、H）が祖父母世代と同居もしくは近隣で暮らしている。8人の母親全てが有職者であるが、祖父母を頼りにしているという語りが多々聞かれた。たとえば園への子どもの送迎や帰宅後の世話、急な事態への対応である。これは祖父母がかつて親世代の時、やはりそのまた祖父母世代に子どもの世話をしてもらっていたから、今、祖父母世代になって孫の面倒を見るのは当たり

前という意識を抱いているのだという（母親Fによる）。この傾向はとりわけ島外出身者の語りに顕著で、たとえば母親Fは、「子どもが赤ちゃんのうちには働かずに子どもの面倒を見たかったと思ったが、今になると、おばあちゃんに子どもの面倒見てもらってきたことが子どもにとって良かった」と語っていた。「おばあちゃん頼み」と繰り返し表現していたが、それは小豆島出身でこれまでずっと島で暮らしている祖母が地域の人と深くつながっており、その繋がりを介して子どもたちや島外から嫁いで来た母親が地域の輪に入ることができたということの意味しているのだろう。同じように、母親Hは「子どもの行事で出される行事食の作り方をお姑さんから聞いて、やり方を受け継いでいるんだなあと感じる」と語った。地域に伝わる行事や、それにまつわる食文化の伝承にも祖父母世代が架け橋となっているといえる。その意味で小豆島での子どもの育ちは祖父母世代の「孫育て」の下支えなくしては成り立たないと言えるのではないだろうか。

ここまでのところで「祖父母世代の孫育て」が顕著であることが明らかになったので、その点を質問紙調査の結果で確認してみることにした。「日頃、お子さまを預かってもらえる親族、知人はいますか」についての結果を図2に提示する（分析対象者109名）。

日常的もしくは緊急時に祖父母に預かってもらえるという回答した者の割合が約4割から6割であった。さらに、「祖父母等の親族に預かってもらっている状況についてお答えください」の結果（図3）を見てみると、祖父母等の親族が子どもを預かることについて特に問題を感じていないと回答するものが6割を超えていた（分析対象者109名）。「その他」には、義祖父母なので気を遣うといった記述がいくつか見られたが、母親の出身地に関係なく、祖父母世代に子どもを預けるという関係が成り立っていることが見て取れた。

ところで、こうしたメリットの反面、密な繋がりが時に煩わしかったりうっとうしかったりすることもある。本人や家族について「知られている」ことが煩わしく思うときもあるようであった。また、「子どもの数が少なく同級生が近所にいないことが寂しい。またいつも同じようなメンバーでの関わりになるので視野が狭くなるのではないか。そのメンバーでの雰囲気には馴染みやすいけれど、違うメンバーの中では適応しづらくなるのではないか」などの心配が

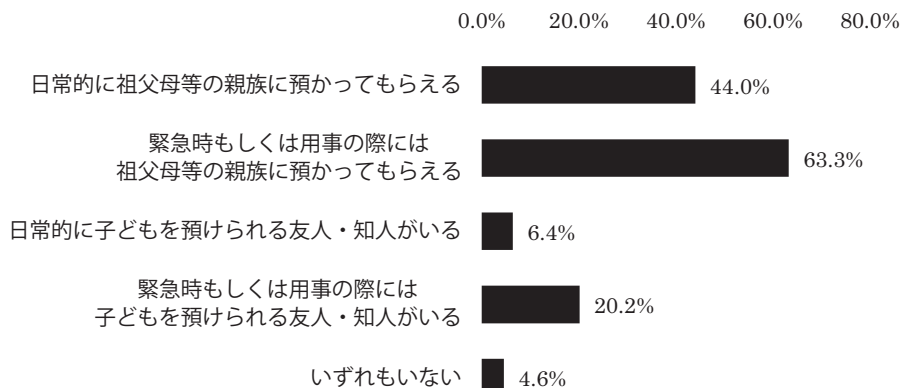


図2 子どもを預ける対象

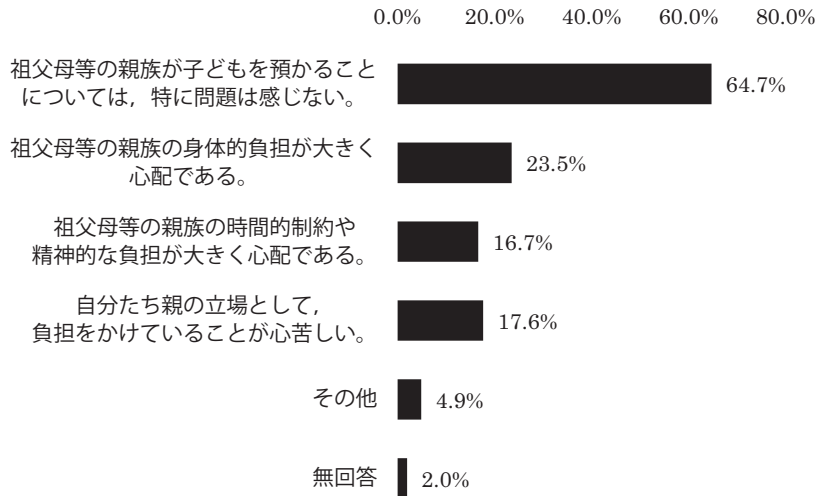


図3 父母等の親族に子どもを預ける際の心境

挙げられていた（母親B）。母親Hは、小中高と同じメンバーの仲間内でいじめが起きたら逃げ場がないことの不安を述べていた。こうしたデメリットの解決策として、子どもが将来、島外に出ることを想定していた。たとえば母親Fは「父さんと母さんは島外で出会ってしばらく島外で暮らしていたけれど、二人で話し合って小豆島に帰ってきた。だから子どもたちにも一度島の外の世界を経験して欲しい」のだという。網の目のような密な地域社会で大人に守られて育つことは子どもに安心感を与えることができる。島で過ごす子ども時代は常に見知った顔なじみの関係にある。こうした島での暮らしと、島外（たとえば都市部）での暮らしにギャップがあればあるほど、子どもの自立のプロセスに難しさが生じる可能性があるだろう。とはいえ、これまでの暮らしで作り上げてきた昔ながらの人との繋がりは「子どもにとっての暮らしやすさ」であることに間違いはないであろう。

まとめ

本調査は小豆島出身のある学生との出会いに端を発し、人生移行に伴うライフイベントで心理的危機が生じた時に、その立ち直りを支えるような子育ての環境を捉えることを目的とした。そのため「小豆島らしい子育て」の環境に迫るべく、現在子育て中の母親が捉える小豆島での子育てのメリット・デメリット、それへの解決策の観点から調査した。その結果、子育て環境の対人関係、すなわち、その地域に古くから繋がっている社会的ネットワークによって作りだされる「子どもを守ろうとする風土」があることが、小豆島での子育てのメリットと認識されていることが分かった。しかしその一方で、島外から嫁いできた母親は地域社会に溶け込むことの難しさを感じ「よそ者感」を抱く可能性があることがデメリットになりうることも分かった。そこのところを解決するためにママ友の繋がりとといった若い世代同士での新たな人間関係を構築していることも明らかになった。また「おばあちゃん頼み」という語りがあった

ように、子育てにおける祖父母の役割が大きく、それが母親に安心感をもたらす環境になっていた。しかしながら「義理の親なので…」といった遠慮もあり、その関係の持ちよりの複雑さもうかがえた。以上の結果から、「子どもを守ろうとする風土」をつくりだすために、祖父母世代を介して昔からの社会的ネットワークに溶け込んで世代と世代が繋がっていくパターンと、そうしたネットワークとは別に同世代同士で繋がっていくパターンを浮き彫りにしたところに本調査の意義があったと思われる。また、こうした繋がりのパターンは居住している地域によることがうかがわれた。本研究では島出身か否かに着目したが、これに加えて「地域によって子育てへの共同体としての意識」が異なることが浮き彫りになった。この点も大きな成果であったと考えている。すなわち、子育て家庭を地域から浮遊して捉えるのではなく、その地域に暮らす人々が抱えている共同体としての共通理解や暗黙のうちの了解されるものなど、目には見えない心の繋がりに我々が目を向ける必要性を示唆している。今後は、本資料には紙幅の都合上含めることができなかつた結果も含め、「共同体としての地域性」の中身を明らかにするべく、様々な地域でのその土地ならではの子育てのありようを捉えていくことが望まれる。

引用文献

- 1) 宮内 洋・菅野幸恵・請川滋大・岡本依子・根ヶ山光一 (2003) 離島の子育て 明治安田こころの健康財団研究助成論文集 39.63-72.
- 2) 進野智子・小林小夜子 (1999) 幼稚園から小学校への意向に関する発達心理学的研究 I 長崎大学教育学部紀要—教育科学—.56.63~70.
- 3) 山本多喜司 (1991) 人生移行の発達心理学 北大路書房.
- 4) 有岡道博 (2016) 離島の子育てについて～岡山県笠岡市真鍋島でのフィールドワークを通して. 美作大学・美作大学短期大学部紀要.61.77~88.
- 5) 平野公子と島民のみなさん (2016) おいでよ、小豆島 晶文社.

謝辞

本研究を遂行するにあたって平成25年度～28年度まで行吉学園教育・研究助成費を受けました。調査にご協力いただきました小豆島土庄町役場の方々、幼稚園・保育園の先生方、保護者の方々に深く感謝申し上げます。